

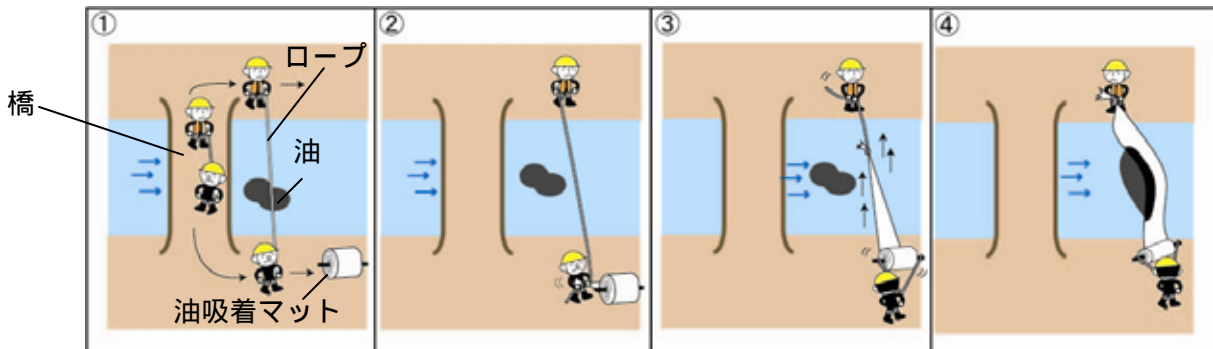
(9) 河川での油流出事故時の対応

河川における油流出事故は、一般的に小規模ですが、流れがあること、水道、農業、その他の用水として影響が大きいこと、人家等に近いことから火災や健康被害が発生するおそれがあること等、海面での事故とはまた別の観点から深刻な問題です。

このため、海面等での油流出事故の場合、軽油、灯油、ガソリンなどは大抵は放置して蒸発を待ちますが、これらの軽質油についても健康被害や火災に留意しながら迅速な対応が必要になることがあります。

一般的な回収法

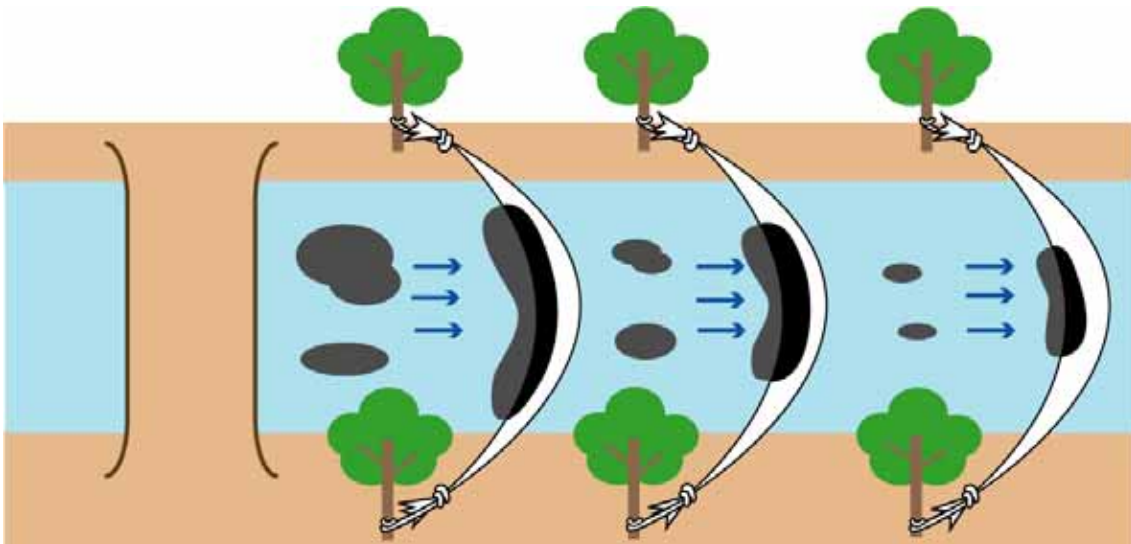
長尺型油吸着マット、油回収ネット、吹流し型油吸着材（以下「油吸着マット等」といいます。）を両岸に展張します。



橋などを使って両岸をロープで連絡し、油吸着マット等を対岸に引き寄せます。両岸の水際は、隙間の生じないようにします。（P 2 2 参照）

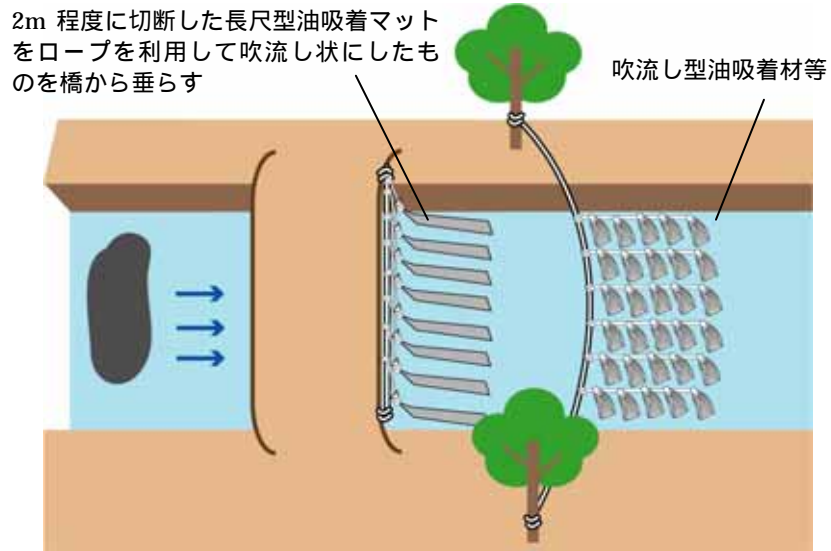
長尺型油吸着マットは0.5 ノット（0.9 km/h）程度までの水流が弱く油の量が少ない時に使用します。油回収ネットは水流2 ノット程度で比較的大量の油を吸着できます。吹流し式は水流3～4 ノットまで使用できます。

回収しきれない場合は、川下側に2重、3重に展張します。流速が速い場合にも多重展張で対応できます。（下図参照）



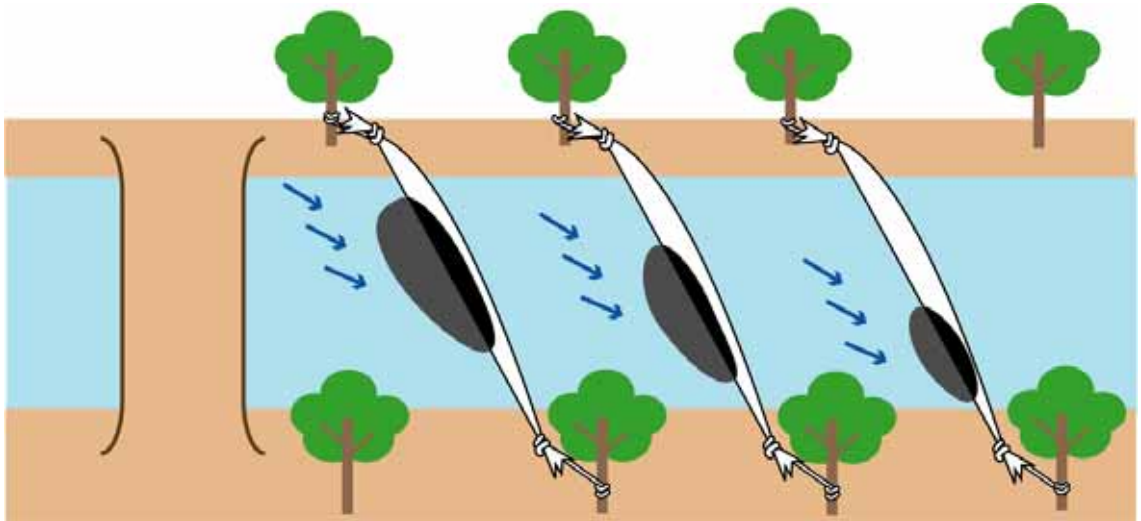
流れの速い場合の回収法（川全体に展開）

適当な長さ（2 m程度）に切断した長尺型油吸着マット等を何本もロープに縛り付け、吹流し状に流れに乗せて吸着させる方法
下図のように多重に展開すると効果的です。

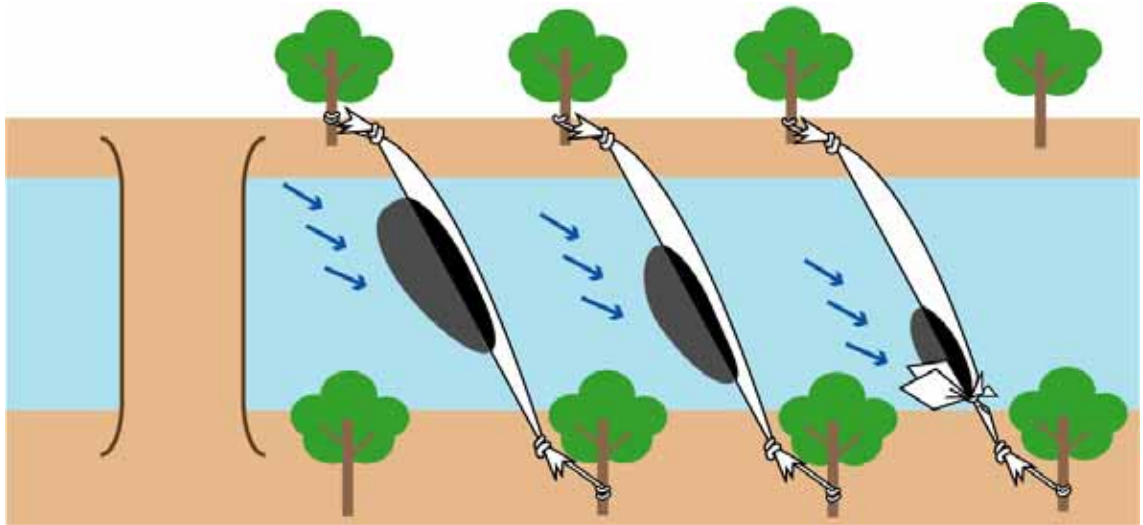


油吸着マット等を斜めに展開する方法

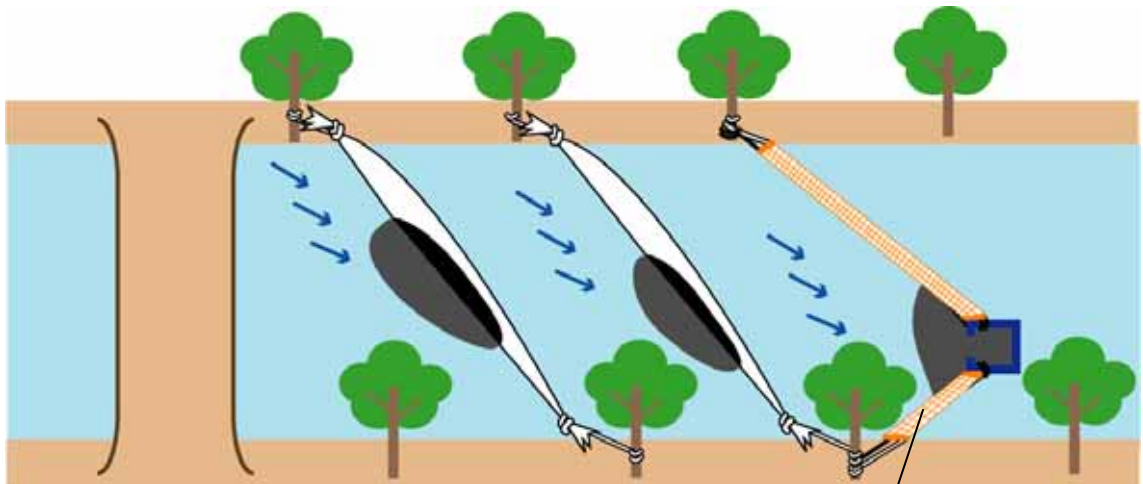
油吸着マット等を斜めに張り、見かけの流速を減少させます。



川下側の水際の油吸着マット等の取り付け部は、油が隙間から逃げないように末端処理（P 2 2 参照）をしたり油吸着マットや吹流し式を束ねたものでふさいで回収します。回収場所は足場の良いところを選びます。



油回収枠（P 3 9 参照）の前面（川上側）の水面付近に開口部を開けたもの（板や大きめの箱を利用して製作できる。）があれば、効果的に待ち受け回収ができます。



油回収枠を使用する場合は油吸着マットでは強度が足りないので、油回収ネット（P 3 8 参照）を使います。

河川での包囲回収法（橋の活用）

- 流出油の川下側（A）に長尺型油吸着マットを用意します。
- 橋などを利用して、油吸着マット等1本に対し6mmロープ2本の片方の端を持った作業員 a、b を両岸に一人ずつ配置します。
- （A）で作業員 a は1本のロープにマットの先端を縛ります。
- 作業員 b はロープを（B）の方向に引っばります。
- b は引き寄せに使ったロープを外し、もう1本のロープを油吸着マット等の先端に縛りつけます。
- b は（B）から油を囲むことのできる（C）まで移動します。
- a は手に持っているマットを縛ったロープをどこか適当なところに固定します。
- a は（A）から足場の良い陸揚げ地点（D）までマットの反対の端をもって移動します。a は油を囲い込むため、（D）で手元に残ったロープを引き寄せます。
- 川岸を汚さないようシート等の上に揚収します。

軽質油に対応する場合は、火災とガスの吸入に十分注意する必要があります。
 河川での流出油回収は、橋を活用すると効率よく作業ができます。
 強風時の油吸着マット展張には Z 型油吸着マットを使用します。マットが風にあおられにくく簡単に展張できます。

